『和泉式部日記』の孤絶感 ――「人はことに目もとゞめぬを」考――

菅原領子

一　はじめに

『和泉式部日記』（以下『日記』と略称）は次のように始まる。

夢よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとゞめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮に候し小舎人童なりけり。(一)（一一頁）

冒頭から登場し、「夢よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ明かし暮ら」し、「築土の上の草青やかなる」を「あはれとながむる」人物は、少し後に「女」と称されることになる『日記』の主人公なのであるが、築土の上の草を物思いに沈んで眺める彼女の行為について、「人はことに目もとゞめぬを」という挿入句、すなわち「文脈の折れまがり」(二)が見られる(三)。作品起筆部のこの場面、庭の草木の生命感と憂愁に満ちて日を送る女との対照、また木の下闇の鬱勃とした暗さの印象は鮮やかであるが、同時に、女の憂愁が他の人々の抱くものとは種類も深さも違うものであることが、「人はことに目もとゞめぬを」の一句にさり気なくも強く主張されている。『日記』は始まったばかりであり、読者にとって主人公は未だ具体的な像を結び得ないが、この時点で、他人とは違う物思いを抱えた、いわば孤絶した主人公の姿を提示した作者の思いとは、どのようなものであったのか。『日記』執筆の姿勢と関わらせて、「人はことに目もとゞめぬを」の一句に込められた意味を探ってみたい。

二　手習文の「人はかくしもや思はざるらん」

『日記』では、女と宮の共感が既に達成された、女の宮邸入り直前においても、贈答歌に続いて「などいふ程に、例のつれ〴〵なぐさめて過ぐすぞ、いとはかなきや」と記すほど、「つれ〴〵」「はかなし」という生に対する認識が印象的であり[四]、女が独り物思いに耽る場面もしばしば表れる。しかし、『日記』は女と帥宮が様々な障害を乗り越えて恋を成就させるまでを描いているから、女のその物思いは、当然宮にまつわるものであることが多い。宮に関わる物思いと明示されていないのは、宮が登場する以前の冒頭部と、手習文（後述）を除けば、

①〔石山詣で〕仏の御前にはあらで、古里のみ恋しくて、かゝる歩きも引き替へたる身の有様と思ふに、いともものがなしうて、（四五頁）

②晦方に、風いたく吹きて、野分だちて雨など降るに、つねよりももの心細くてながむるに、[五]（四九頁）

③すべてこの頃は、折からにや、もの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。（五〇頁）

の三箇所を挙げられるくらいである。しかもこれら三例も、次の理由で宮との関わりを想定できる。①はわざわざ石山寺まで参詣に来ていながら都を恋しがっていることが女の宮への思いを感じさせ、またそもそもこの参詣が、宮自身「久しうもなりぬるかな」（四五頁）と思うほどの途絶えを受けて、「つれ〴〵も慰めむ」と思い立たれたものである。②③は、風の強い日や有明月の頃のことで、直後に宮が文をよこしたり訪れたりして女を喜ばせていることから考えると、この心細さの背景には宮からの消息が（当然期待される折であるのに）ない、という女の物足りない思いがあると見るべきであろう。

右の③に続いて、手習文の一段がある。女が「ながめてぞありける」ちょうどその時宮がやって来たのだが、侍女や下仕えの者達が門を開けるのに手間取っている間に、宮は帰ってしまった。女はそのまま起きて「この暁起きのほどのことども」（五一頁）をすさみ書きしていたのだが、宮からの文が届き、その返事として「この手習のやうに書きゐたるを、やがて引き結びて奉る」（五二頁）。それを受け取った宮が見てみると――という形で、手習文が展開する。少し長いが引用する。

風の音、木の葉の残りあるまじげに吹きたる、つねよりも物あはれにおぼゆ。ことぐしうかき曇るものから、たゞ気色ばかり雨うち降るは、せんかたなくあはれにおぼえて、

秋のうちは朽ちはてぬべしことわりの時雨に誰か袖はからまし

歎かしと思へど、知る人もなし。草の色さへ見しにもあらずなりゆけば、しぐれんほどの久しさもまだきにおぼゆる風に、心苦しげにうち靡きたるには、たゞ今も消えぬべき露のわが身ぞ、あやふく草葉につけてかなしきまゝに、奥へも入らでやがて端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。人はみなうちとけ寝たるに、そのことと思ひわくべきにあらねば、つくぐしと目をのみさまして、なごりなう恨めしう思ひ臥したるほどに、雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもや思はざるらん、いみじう堪へがたき心地して、

まどろまであはれいく夜になりぬらんたゞ雁がねを聞くわざにして

とのみして明かさんよりはとて、妻戸をおし開けたれば、大空に、西へかたぶきたる月の影遠く澄みわたりてみゆるに、霧りたる空の気色、鐘の声、鳥の音ひとつに響きあひて、さらに、過ぎにし方、いま行末の事ども、かゝる折はあらじと、袖のしづくさへ、あはれにめづらかなり。

我ならぬ人もさぞ見ん長月の有明の月にしかじあはれは

たゞ今、この門をうちたゝかする人あらん、いかにおぼえなん。いでや、誰かかくて明かす人あらむ。

よそにても同じ心に有明の月を見るやと誰に問はまし（五二～五五頁）

前半の「ことわりの時雨に誰か袖はからまし」「歎かしと思へど、知る人もなし」「人はみなうちとけ寝たるに、……つくぐしと目をのみさまして」「雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもや思はざるらん、いみじう堪へがたき心地して」には、独り眠れずに物思いに耽る女の孤独感が様々に綴られている。特に、「人はかくしもや思はざるらん」は、作品冒頭の「人はことに目もとゞめぬを」に通ずる表現として注目される。周囲の者は皆寝入っていると予め語られている上、「らむ」が用いられていることから、ここで言う「人」とは身辺にいる侍女のような誰か特定の人物ではなく、仮にいま自分と同様に目を覚ましていてこの雁の声を聞いている人がいたとしても、その人達のうちの誰も自分のようには……との謂いで、不特定の、いわば

他者一般という程の意味を持っている。女の思いは「さらに、過ぎにし方、いま行末の事ども、かゝる折はあらじ」と昂揚して、「我ならぬ人もさぞ見ん」「たゞ今、この門をうちたゝかする人あらん、いかにおぼえなん」と感慨を分かち合う人を求め、直後に「いでや、誰かかくて明かす人あらむ」「誰に問はまし」と、そのような人の存在を疑ってみせるが、この後には「宮わたりにや聞えまし、と思ふに、奉りたれば、うち見給ひて」（五五頁）と続いている[k]。

手習文の直前には、宮からの歌を受け取った女が、「猶折節は過ぐしたまはずかし、げにあはれなりつる空の気色を見給ひける、と思ふに、をかしうて」（五二頁）、たまたますさみ書きしてあった手習文をそのまま返事としたのだ、とある。だが、女は門が叩かれるのを聞いて、「あやし、誰ならん」（五〇頁）「同じ心にまだ寝ざりける人かな、誰ならん」（五一頁）と、来訪者は誰かと訝しんでいるが、それが宮であることは読者には既に明かされているし、「いぎたなしとおぼされぬるにこそ、物思はぬさまなれ」（五〇頁）と敬語を用いた女の心内語から考えても、この時点で女の思いは来訪者である宮へと向かっていると読むべきであろう。手習文の直後で、先に引いたように「宮わたりにや聞えまし、と思ふに、奉りたれば」と述べられていることも考えれば、いずれ宮に読んで貰うことを前提として、この手習文は書かれていると見ることができる。

さて、しばしば物語的と評される[l]『日記』であるが、それは、例えば『源氏物語』をはじめとする王朝物語に見られるような、景情一致の流麗な文章を豊かに含むという意味ではない。引歌が見られるのも会話や消息中においてのみであるし、地の文は贈答歌と二人の心情または恋にまつわる事情を語ることを主な役割としており、情景の描写そのものを目的とするような場面はさほど多くはない[m]。そのような例としては、ある月の明るい夜、宮が扇に文を載せて女に渡した後、歌を口ずさみながら前栽を歩く場面、十月頃、宮が檀の紅葉を手にして高欄に寄りかかり、女に連歌をしかける場面が挙げられるが、景情一致のまとまった描写となると、冒頭と手習文くらいである。作品が最高潮を迎える十月十日頃の場面も印象的ではあるが、「月はくもり〳〵しぐるゝほどなり。わざとあはれなることの限りをつくり出でたるやうなるに」（五八～五九頁）と述べた後は、思い乱れて泣く女とそれを慰める宮の姿そのものを描いており、そこにある景物を通して登場人物の心が描写されるような書き方ではない。冒頭と手習文の文章がやや特別なのである。

渡辺実氏は、歌文融合の点で『日記』の手習文が『日記』

中の書簡文に連続する一方で、『日記』の地の文にも連続することに注目され、『蜻蛉日記』では珍しかった歌文融合や心情とつながる風景描写が『日記』において可能になった、とされている(九)。如上の私見では、「心情とつながる風景描写」は『日記』全体に遍在するものではなく、冒頭部などに限られるのではないかと考えるのであるが、渡辺氏が手習文の書き出しと『日記』そのものの書き出しとを「同質のものである」とされた(十)ことは首肯される。

手習文には「雁のはつかにうち鳴きたる、人はかくしもや思はざるらん、いみじう堪へがたき心地して」との一節があった。かすかに聞こえてくる雁の声に女が強く感情を揺さぶられることは、「人はかくしもや思はざるらん」の挿入句がなくても表現できる。しかし女は、己の感じ方が他者一般とは違うことを、一言添えずにはいられなかった。誰を頼りにしてよいのかという心細さを詠み、独り物思いをしていてもそれを理解する人のいない孤独や、何の屈託もなさそうに眠っている侍女達の中で、自分独り起きて物思いを尽くしていることを書いてきて、雁の声を聞くにつけても普通の人にはない物思いを自分はするのだ、と言う。この後、「とのみして明かさんよりはとて」、やや気を取り直すかのように視線を屋外に転じ、ここを転機として思いははっきりと宮へ向かう。既に述べたように、「我ならぬ人」「たゞ今、この門をうちたゝかする人」「かくて明かす人」「よそにても同じ心に有明の月を見る」人、いずれも宮を念頭に置いていよう。「人はかくしもや思はざるらん」と、すべての他者から孤絶した自分の心のあり方、物思いの深さを述べた女は、それを最終的には宮に対して訴えたのであった。この訴えは、冒頭の「人はことに目もとゞめぬを」においても同様ではなかったろうか。

三　『蜻蛉日記』における自己と他者との対比

右に『日記』に表れた〈他の人達とは違う自分〉の思いについて見てきたが、では『日記』に先行する女流日記文学、『蜻蛉日記』には、〈他の人達とは違う自分〉の思いはどのように表れているであろうか(十一)。

①〔母の死による〕さらにせむかたなくわびしきことの、世の常の人にはまさりたり。〔肉親が〕あまたある中に、これはおくれじおくれじと惑はるるもしるく、いかなるにかあらむ、足手などただすくみにすくみて、絶え入るやうにす。(上・康保元年秋)

②〔母の供養の〕わざとのことなども、みなおのがとりどりすれば、われはただつれづれとながめをのみし

て、「ひとむら薄虫の音の」とのみぞいはるる。（同）
③〔身内の者達が〕おのがじしひきつぼねなどしつつあめる中に、われのみぞ紛るることなくて、夜は念仏の声聞きはじむるより、やがて泣きのみ明かさる。（同）
④〔留守中に兼家が珍しく訪れたことを知らされて〕「さて」など、これかれ問ふなり。われはいとあさましうのみおぼえて来着きぬ。（中・天禄元年六月）
⑤〔兼家の使者が帰った後〕このたびのなごりは、まいていとこよなくさうざうしければ、われならぬ人は、ほとほと泣きぬべく思ひたり。／かくおもておもてに、とざまかくざまに言ひなさるれど、わが心はつれなくなむありける。（天禄二年六月）
⑥〔初瀬詣で〕人いと多く、きらぎらしうてものすめり。……人はかくてののしれど、わが心ははつかにて、見めぐらせば、あはれに、（天禄二年七月）
⑦南面の、格子も上げぬ外に、人の気おぼゆ。人はえ知らず、われのみぞあやしとおぼゆるに、妻戸おし開けて、〔兼家が〕ふとはひ入りたり。（天禄二年十二月）
⑧人は、童、大人ともいはず、「儺やらふ儺やらふ」と騒ぎののしるを、われのみのどかにて見聞けば、ことしも、ここちよげならむところのかぎりせまほしげなるわざにぞ見えける。（同）
⑨たたむ月に死ぬべしといふさとしもしたれば、この月にやとも思ふ。相撲の還饗などもののしるをば、よそに聞く。（下・天禄三年八月）
⑩紅梅の、常の年よりも色濃く、めでたうにほひたる、わがここちにのみあはれと見たれど、なにと見たる人なし。（天延元年二月）
⑪〔物詣で〕いみじう苦しきままに、かからである人もありかし、憂き身ひとつをもてわづらふにこそはあめれ、と思ふ思ふ、入相つくほどにぞいたりあひたる。（天延二年二月）
⑫〔雨が降り出して〕「簑、笠や」と人は騒ぐ。われはのどかにてながむれば、前なる谷より、雲しづしづと上るに、いとものの悲しうて、（同）

①は母の死によって自分が感じるつらさを「世の常の人にはまさりたり」とし、また、多くの肉親の中でも自分の動揺がとりわけひどかった、とする。これに続く②③も、供養や忌み籠もりで何かと動いている周囲をよそに、自分一人の悲しみに沈んでいる。④は兼家が久しぶりに来訪したと知って、侍女達が留守居の者にあれこれと経緯を尋ね

るのだが、わざと自分の外出中に来たのではないかとまで疑っている作者は、ひたすら鬱々とするばかりである。⑤は鳴滝籠もりの最中のことで、兼家からの賑々しい使者が強く下山を勧めて帰ってしまった後、悄然とする侍女達と、下山する気になれない作者とが対比されている。⑥は初瀬詣での途次で、一行の数も多く、浮き立つ人々とは裏腹な作者の佇まいである。⑦は雨音の中で兼家の来訪を待つ作者の、侍女達とは違う、研ぎ澄まされた神経が窺われる。⑧は歳末に賑やかに追儺を行う家中の人々に対し、自分のつらい境遇を思うとそれに溶け込めないと言う。⑨も同様に盛大な行事に浮かれる世間と、翌月に死ぬだろうとのお告げを受けている作者との対比である。⑩は紅梅の例年にない素晴らしさに感慨を抱くが、周囲の者は何も気づかないと言う。但し、すぐに続いて、この紅梅を道綱が大和だつ女に贈るとあるので、作者だけが孤独に紅梅を見つめているというこの一節は、一つのポーズであるとも言えよう。⑪は山奥のとある寺に参詣し、道中の苦しさに、何故自分はこのような思いをしているのかとふと顧みた感慨、⑫は帰途の雨具の手配に奔走する従者をよそに、一人物思いに耽る場面である。

これらの例から言えるのは、作者自身と対置されるのが、多く、家族や侍女・従者など、周囲の人物達であることである。周りが忙しそうにしたり或いは楽しそうにしたりしている、その中で作者が自分一人の物思いに沈んでいる。しばしば、歌を独り口ずさんだり、心の中だけで呟いたりしているのも、同様の心境を表すものであろう。不特定多数の他人が作者と対置されているのは⑨と⑪であるが、⑨は近々の死を予言されている作者との対照で華やかな行事に浮き立つ世間を引き合いに出したものであろうし、⑪はこれほどつらい思いをしない人もあるだろうとは言っても、自分一人だけの独自の辛苦を強調しているわけではない。また、この物詣でを語った一段の最後には、「あはれなる人〔養女〕の、身に添ひて見るぞ、わが苦しさも紛るばかりかなしうおぼえける」と記され、作者の思いは養女のいじらしさ、いとおしさへと収束されている。

作者の様々な物思いを綴る『蜻蛉日記』であるが、〈すべての他者と違う〉物思いに沈む自己の姿は主張されていないと見るべきであろう。

四　『紫式部日記』『讃岐典侍日記』『成尋阿闍梨母集』における自己と他者との対比

次に『日記』以降の平安女流日記文学について、〈他の人達とは違う自分〉の思いが表出されている例を見てゆく。

『紫式部日記』からは、次のようなものが挙げられる。

①〔美しい菊をとりどりに植えてあるのを見渡して〕げに老も退ぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなしわかやぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを、見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の、ひくかたのみつよくて、もの憂く、思はずに、嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。

②〔中宮が〕御物忌におはしましければ、御前にもまゐらず、心ぼそくてうち臥したるに、前なる人々の、「内裏わたりはなほけはひことなりけり。里にては、いまは寝なましものを。さもいざとき沓のしげさかな」と、いろめかしくいひゐたるを聞く。／年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな／とぞひとりごたれし。

①の「思ふことの少しもなのめなる身ならましかば」は、人並み以上の深い物思いがつきまとっている自分であることを述べている。②は「いろめかしくいひゐたる」女房達と「心のうちのすさまじきかな」と独詠する作者との懸隔が印象的な一節である。いずれもよく知られた場面であるが、しかし〈他の誰とも違う〉という自己認識ではない。

『更級日記』には、特に挙げるべき例は見出せない(十二)。

『讃岐典侍日記』には、周囲の人々と自分との対比を描く部分が多く見られる。

①〔堀河天皇は〕御殿ごもりぬる御けしきなれど、われは、ただまもりまゐらせて、おどろかせたまふらんに、みな寝入りてとおぼしめさば、ものおそろしくぞおぼしめす、ありつるおなじさまにてありけるとも御覧ぜられんと思ひて、見まゐらすれば、御目弱げにて御覧じあはせて、「いかにかくは寝ぬぞ」とおほせらるれば、御覧じ知るなめりと思ふも、堪へがたくあはれにて、(上)

②みな人々、うちやすめとておりぬ。されど、もし召すこともやと思へば、御障子のもとにさぶらふ。……しばしばかりありて、御扇打ち鳴らして召す、「それ取りて」とおほせらるべきことありければ、召して、「なほ障子立ててよ」とおほせらる。よくぞおりでさぶらひけると思ふ。(同)

③「……『ただ典侍ばかりはさぶらへ』とおほせらるる」とて、三位殿おはして、殿たち、みな障子の外に出でさせたまひぬ。（同）

④〔堀河天皇崩御、女房達が慟哭する〕われは、御汗をのごひまゐらせつる陸奥紙を顔に押しあててぞ、添ひゐられたる。あの人たちの思ひまゐらせらるらんにも劣らず思ひまゐらすと、年ごろは思ひつれど、なほ劣りけるにや、あれらのやうに声たてられぬはとぞ、思ひ知らるる。（同）

⑤〔鳥羽天皇への再出仕を求められる〕しもの人などは、年ごろももしきのうちに遊びならひたる心地に、つくづくと思ひ絶えたる里居はくちをしう思ひけるに、かかること出できたるをうれしう思ひたるけしきにて、心地よげに思ひけるを見るは、つれなくうらめしきに、十一月にもなりぬ。（下）

⑥〔再出仕の支度の〕いそがしさ、いまいくほどなく残り少なくなりにたれば、おほかたの人も、夜を昼になして、ものも聞こえぬまでいそぐめれば、われは、この日ならんからにいそがしとて〔堀河天皇の月命日の追善供養に〕参らざらんがくちをしきに、出で立つを、一人うけひく人なし。（同）

⑦〔鳥羽天皇即位式の準備を〕人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわげども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、（同）

⑧四月の衣がへにも、女官ども、例のことなれば、われもわれもと、身のならんやうも知らず几帳ども取りあへる、人見あへれど、われは見まほしからず。〔堀河天皇が〕これををかしとおぼしめしたりしが、思ひ出でられて。（同）

⑨〔諒闇が明ける〕殿をはじめて、殿上人、蔵人、装束かへ纓おろし、女房たちの姿、われもわれもと、いろいろとつくしあはれたるさまぞ、たたおりけん心地してぞ、並みゐられたる。……われ一人脱ぎかへでさぶらふべきならねば、脱ぎかへつ。局におりても、まづ着かへんともおぼえず。これをさへ脱ぎかふるこそ、院の御かたみに思ひつれ、これをさへ脱ぎつれば、いと心ぼそし。……脱ぎかへまうき心地する。かぎりあることなれば、いかがとて脱ぎつ。（同）

⑩〔鳥羽天皇、内裏へ遷御〕二十一日御わたりと定まりぬ。人々、いとなみあひたり。されば、われは、変はらぬ九重のうちの有様を見んに、はじめたる御わたりに、え念ずまじき心地のすれば、参らんとも思はぬに、「院より、さるべき人々みな参るべきよし。参ら

せたまへ」と、三位殿よりあれば、…「…思ひ念じて、なほ参らせたまふべき」とて、出だし立てらるれば、かばかりのことだに心にまかせぬことと思ひながら、出で立つ。（同）

⑪〔鳥羽天皇の御寝に侍して、往時を回顧〕……あはれにのみぞ。みな人はよげに寝ぬれども、われは、もののみ思ひつづけられて、目もあはず、（同）

⑫いつのまに変はりける世のけしきぞと、よろづの人たちのそのかみの人ならぬなかに、われば かりありし昔ながらの人、いかに結びおきける前の世の契りにかと、もののみ思ひつづけられて、あはれしのびがたき心地す。／明けぬれば、いつしかと起きて、人々、「めづらしきところどころ見ん」とあれど、具して歩かば、いかがもののみ思ひ出でられぬべければ、ただほれてゐたるに、（同）

⑬〔五節が近づく〕女房たち、われもわれもと、「御覧の日の童とて、ゆかしきこと。寅の日の夜、すでに例のことなれば、殿上人、肩脱ぎあるべければ、いづれよりかのぼるべき」と問ひあはれたれば、いらへせんともおぼえず。（同）

⑭〔年の暮れ〕晦日になりぬれば、朔日の御まかなひすべきよし、おほせられたれば、〔家の者が〕いそぎあひたるにも、われはただ、「別れやいとど」とのみおぼえて。（同）

①②③は近侍の女房の中でとりわけ自分が甲斐甲斐しく病床の堀河天皇に仕えた思い出、④は取り乱して泣き騒ぐ女房達の中で、自分一人が衝撃の余り涙も出ずに茫然としていたこと、⑤は不本意な作者の気持ちなど知らぬげに、再出仕を楽しみにする侍女達、⑥は家の者が出仕の準備に追われる中を、依怙地なまでに堀河天皇の追善に参加しようとする作者、⑦⑧は宮中の様子を見て楽しむ女房達と、独り心楽しまぬ作者の姿を述べる。⑨は諒闇が明けて早速に綺羅を飾る女房達と、喪服を脱ぎたくない作者の気持ち、⑩は遷御に奉仕するのを控えようとする作者と、それを強いて求める周囲の態度、⑪は心安らかに眠る女房達と寝られずにいる作者、⑫⑬は宮中の様子や行事を見物するのを楽しみにする女房達と全く心惹かれぬ作者、⑭は年始の奉仕に向けて支度に余念のない家中の者と、年の暮れに際して堀河天皇追慕の念を新たにする作者との対比である。

無論、作者自身をも含めた女房達を「御几帳のうちなる人」や「われら」と呼んで一団として扱ったり、死を悟った堀河天皇が以前から親しく仕えていた定海阿闍梨に「経誦して聞かせよ。定海が声聞かんも、今宵ばかりこそ聞か

め」と言う場面では、「それを聞かん心地、たれかはなのめなる心地せん。たれも堪へがたき心地ぞする」と、近侍の者が共有する悲哀を記したりもする。また、家人の反対を押し切って堀河天皇の追善供養に参った際は、そこに集う人々に非常な共感をもって迎えられたことを述べ、いつも作者と周囲との距離が前面に押し出されているわけではないが、①②③は膝几帳のエピソード(十三)や扇引き(十四)その他の思い出と併せて、作者が堀河天皇にとって特別な存在であったことを主張している。④～⑭は、同僚女房や家人と、天皇崩御の悲しみから離れられない作者との気持ちの隔たりを伝える。

「大切な堀河天皇とわたくしとの心の通いあった日々―愛の日々といってもよい―の思い出」(十五)「『天皇と自己の世界』の構築」(十六)を主題とする『讃岐典侍日記』では、作者の思いはひたすら堀河天皇へと向かっている。そこで自己の存在の特別さを言おうとすれば、自ずと、天皇及び自分の周囲の人々と、自分との距離を述べることになるのだろう。したがってここには、〈他の誰とも違う〉自己ではなく、〈特定の他者と違う〉自己が描き出されている。

歌集としての題号を付されてはいるが、日記文学としての実質を備えるとされる(十七)『成尋阿闍梨母集』の場合はどうか。成尋阿闍梨母は八十歳を超える高齢となって、愛息である高僧成尋の傍で余生を送り、成尋に最期を看取ってもらえるであろうという満足に浸っていた。しかし成尋は、高僧であるが故の求道心から渡宋を決意し、母の必死の慰留にも拘わらず決行してしまう。残された母の悲嘆を描いて、『成尋阿闍梨母集』の主題は明確である。そのため、

人々のおのが思ひ思ひもの言ふも、耳にも聞き入れられず、ゆかしうおぼつかなきことのみ覚ゆるに

の一節はあるが、これは成尋のみを恋い慕うあまり周囲の慰めが心に届かないことを言ったもので、周囲と自己との距離感の表れではないと考えられる。むしろこの作品は、作品内部の人物に対しても外部の読者（主に成尋その人を念頭に置いていたのであろう）に対しても、しばしば共感・同情を求める言葉を含み(十八)、「言ふかひもなみだの川に沈みたる身をば誰かは深くたづねん」のような、孤立感の表れと見えるような歌も、実は「いかにも、かならずまで来て、おはしおはせず見んとす」と言い置いていった成尋への恨めしさの表出、悲嘆の訴えと読むことができる。成尋との愛別離苦をひたすらに綴る高齢の母には、〈すべての他者と違う〉という自己認識など、入り込む余地はな

いのであろう。

五　中世女流日記文学における自己と他者との対比

次に、中世の女流日記文学作品における、自己と他者との距離感を表出した例を摘記してゆこう（十九）。

①さすが心あるかぎり、このあはれをいひ思はぬ人はなけれど、かつ見る人々も、わが心の友はたれかはあらむとおぼえしかば、人にも物もいはれず、つくづくと思ひ続けて、（『建礼門院右京大夫集』）

②ただ、「かぎりある命にてはかなく」など聞きしことをだにこそ、かなしきことにいひ思へ、これは、なにをかためしにせむと、かへすがへすおぼえて、／なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢みぬ人やいひけむ（同）

③ほどへて、人のもとより、「さてもこのあはれ、いかばかりか」といひたれば、なべてのことのやうにおぼえて、／かなしともまたあはれとも世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ（同）

④はかなくあはれなりける契りのほども、我が身ひとつのことにはあらず。おなじゆかりの夢見る人は、知るも知らぬもさすが多くこそなれど、さしあたりてためしなくのみおぼゆ。昔も今も、ただのどかなる限りある別れこそあれ、かく憂きことはいつかはありけるとのみ思ふもさることにて、（同）

⑤さだめなき世とはいへどもかくばかり憂きためしこそまたなかりけれ（同）

⑥〔建春門院の崩御を受けて〕なべての世、たれかは思ひ嘆かぬ人あらん。されど、うち向かひたる人〳〵も、わが思ばかり、たれかはあらん。置き所なき心地ぞする。（『たまきはる』）

⑦〔春華門院の不例を案じて〕人〳〵は何とも思ひ合はれぬに、見まいらすれば、さしも思ひ騒ぐまじき御気色とも見えず。……静心なく、心一つを砕きつゝ、……数ならぬ身一つのみ苦しくて、近きも遠きも、驚かせ給事もなし。……御祈りも何事も、心のまゝならん所にて、思ふさまに申さばやと、心一つを砕けど、大方聞き入るゝ人もなし。この例ならぬ御事の初め、人は何とも思分かざりし程より、人候はぬ間に近く参りたれば、（同）

⑧〔世の変転を思って〕人の心も引き換へ、神世の初めなどを聞く心地して、あらぬさまに珍しくのみ聞こ

ゆるにつけて、昔の御事は、いとゞ跡もなき心地して、人知れずあはれなる事も、おなじ心なる人、たれかは交じらむ。（同）

⑨夜もいたく更ぬとて、人は皆寝ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でて見るに、（『うたたね』）

⑩人は皆何心なく寝入ぬる程に、やをらすべり出づれば、（同）

⑪十五夜の月も雪うち散りて、風も冷やかなる枯野の庭の気色、物あはれなれど、同じ心に見る人もなし。（『中務内侍日記』上）

⑫廿日の月なれば、更くるまゝに澄みまさりて面白きに、皆人寝ぬれば、一人起き居て見るに、影も流るゝと見ゆる月は、なをこそ後れざりけり。よろづを思続くるに、果は物恐しき心地して心細し。（同）

⑬「節分にてもなし。何の御方違へぞ」と言へば、「あら、言ふかひなや」とて、みな人笑ふ。されどもいかでか知らむに、……「こゝさへ晴れにあふべきか。かくしつらはれたるは」など言へば、みな人笑ひて、とかくの事言ふ人なし。（『とはずがたり』一）

⑭〔六条殿の供花に〕面〳〵に心ことに出立ち、ひしめき合はるれども、よろづ物思はしき心地のみして、常は引き入がちにてのみ侍しほどに、（同　二）

⑮〔北山准后の九十賀に召し出されて〕何となく、世の中の華やかにをもしろきを見るにつけても、かきくらす心の中は、差し出でつらむも悔しき心地して、（同　三）

⑯御仏事始まりつゝ、多く聴聞せし中に、我ばかりなる心の内はあらじとおぼゆるにも、悲し。（同　五）

『十六夜日記』『弁内侍日記』『竹むきが記』には特に挙げるべき例は見出せなかった。

⑥以下の例は、いずれも女房達や同席者など、周囲の人物と自己との隔たりを言ったものであり、自分以外のすべての他者と自分との違いを述べているのではない。

①～⑤の『建礼門院右京大夫集』の筆者は、周知の通り源平の争乱で恋人平資盛を喪っている。④に見られるように、同時代の多くの人々が自分と同じ思いをしているのだとの自省もあるが、しかし幾分理性的にそう述べてみても、やはり我が身のこととして考えるとき、古今に類のない悲劇に遭ったという自らの思いを、「さることにて」と肯定せずにいられない。戦のために恋人が去り、遠く離れて安否を案ずるうちにやがてその死の報を受け取った悲しみは、老病による死別などといった通常考えられる別離による悲しみとはまったく違うのだと、右京大夫は記す。した

がって①③のように、知人の慰めも受け容れられない。後に大原に建礼門院を訪ねてかつての同僚女房達と涙にむせんだり、「ことに我がおなじ筋なることを思ふ人」と会って語り合ったりもしているが、自分の悲しみ、つらさを「これは、なにをかためしにせむ」「世のつねにいふべきことにあらばこそあらめ」「ためしなくのみおぼゆ」「かく憂きことはいつかはありけるとのみ思ふ」「かくばかり憂きためしこそまたなかりけれ」と繰り返す右京大夫には、自分の悲しみはまったく独自のものであり、それを表出せずにはいられないという思いが強くあったのであろう。右京大夫が記した、自分の悲しみが比類のない独自なものであるとの思いは、体験した悲劇の独自さに裏づけられていると言える(二十一)。

六　おわりに

『日記』の成立時期については諸説あるが、敦道親王の没後数年以内と考える説が有力である(二十二)。『日記』冒頭の女は、故宮すなわち為尊親王を追慕しているという姿勢だが、執筆が敦道親王没後であれば、そこに作者の敦道親王追慕の情が浸透していると考えるのが自然である。

宮亡き後に宮との思い出を綴るにあたり、作者の手元には素材となる消息や歌稿といったものが揃えられていたであろうが、その中には手習文とそれに対する返歌も含まれていたと思われる(二十三)。手習文という長文の消息に対して、帥宮は敢えて文量よりも反応の早さを採り、殆ど添え書きなしの五首重ねの返歌をした。贈・答いずれも特殊な形でのやり取りは、とりわけ印象深いものとして作者に記憶されていたと思われる。『日記』の筆を起こそうとして、作者は、かつての手習文では「人はかくしもや思はざるらん」という思いを宮に訴えることができたが、その宮亡き今、もはや〈他の誰とも違う自分〉を意識しても、それを訴えることのできる相手はいないのだとの認識を新たにしたのではないか。『日記』の冒頭で故宮を追慕する女は、敦道親王を追慕して『日記』を書き始めた作者の姿に重なる。冒頭の「人はことに目もとゞめぬを」は、「君は君われは我ともへだてねば心々にあらむものかは」（八七頁）とまで理解し合った相手を喪い、〈他の誰とも違う〉自分が、今はたった一人で在ることを改めて意識した作者の思いの表れと思われるのである。

「自己に執する女」が書き記した(二十四)女流日記文学には、様々に〈他の人達とは違う自分〉が描かれているが、そこで自己と対比される他者とは多く周囲の人物、特定の誰かであった。『日記』に先行する『蜻蛉日記』において

も、『日記』以降の諸作品においても然りである。ただ、『建礼門院右京大夫集』では、自分の物思い、悲嘆が他から隔絶した痛切なものであるとの思いが繰り返し表現されていた。恋人の都落ち・戦死という悲痛な体験が、そのような認識をもたらしたのであろう。これに比べると、『日記』作者の〈他の誰とも違う〉自己認識が何に由来するかは明確ではなく、敢えて言うなら作者の個性とするしかないが、このような根本的孤絶感とも言うべき自己認識が、他の女流日記文学作品に殆ど見られないことは注目される。敦道親王の早世を経た作者は、〈他の誰とも違う〉心の有り様を抱えた主人公―作者が、彼我一如とでも言えるほどに共感し合える相手に出会い、そして喪ったことを、その『日記』冒頭と手習文によって伝えていると思われるのである。

〈注〉

（一）以下、『日記』本文の引用は岩波文庫（清水文雄校注、一九八一年改版。底本三条西家本）による。必要に応じて他系統本文を参照する。

（二）日本古典文学大系（遠藤嘉基校注、岩波書店、一九五七年）の当該箇所頭注及び補注。

（三）応永本、「人はことに目とめぬを」、寛元本「ことに人はめとめぬを」で同意。

（四）川村裕子氏は「つれづれ」「はかなし」の二語について、『日記』では重い意味を持って用意周到に用いられている、とされる。（「和泉式部日記の背景――「つれづれ」「はかなし」をめぐって――」『活水日文』第二二号、一九九一年三月）

（五）応永本は「野分だちて……もの心細くて」を「ほそう」とするが、誤脱であろう。

（六）〔女が手習文を宮に送り、宮がそれを見た〕旨の記述が、手習文ので前後で重複することになるが、長文の手習文を挟んだことによる作者の不備であろう。（円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記　改訂版』至文堂、一九九四年、考説（二二）参照）

（七）例えば中野幸一「女流日記文学における『紫式部日記』の位置」（女流日記文学講座第三巻、勉誠社、一九九一年）など。

（八）服飾や容貌の描写が少ないことも、このことと関連していよう。

（九）渡辺実『平安朝文章史』（ちくま学芸文庫、二〇〇〇年）一九九～二〇〇頁。

（十）渡辺実『平安朝文章史』（前掲）一九九頁。

（十一）以下に引用する諸作品は、次のテキストによった。

『蜻蛉日記』…新編日本古典文学全集（木村正中・伊牟田

経久校注・訳、小学館、一九九五年）
『紫式部日記』…新編日本古典文学全集（中野幸一校注・訳、小学館、一九九四年）
『更級日記』…新編日本古典文学全集（犬養廉校注・訳、小学館、一九九四年）
『讃岐典侍日記』…新編日本古典文学全集（石井文夫校注・訳、小学館、一九九四年）
『成尋阿闍梨母集』…宮崎荘平『成尋阿闍梨母集　全訳注』（講談社学術文庫、一九七九年）
『建礼門院右京大夫集』…新潮日本古典集成（糸賀きみ江校注、新潮社、一九七九年）
『たまきはる』…新日本古典文学大系（三角洋一校注、岩波書店、一九九四年）
『うたたね』…新日本古典文学大系（福田秀一校注、岩波書店、一九九四年）
『中務内侍日記』…新日本古典文学大系（岩佐美代子校注、岩波書店、一九九四年）
『とはずがたり』…新日本古典文学大系（三角洋一校注、岩波書店、一九九四年）

（十二）夫を喪った気持ちを「世の中にまたたぐひあることともおぼえず」と述べるが、これは悲しみの深さをこのように表現したもので、他の誰が死別に際して味わう悲しみよりも、自分の悲哀が深く独自のものであると、言っているわけではないだろう。

（十三）関白忠実が病床近く参上した際、堀河天皇が傍らに控えている作者を関白の視線から隠すために、膝を高くしたというエピソード。『讃岐典侍日記』中に繰り返して語られる。

（十四）〔堀川の泉を見物した後〕われは、今宵とまりて心やすきところにてうちやすまんと思ひて、とどまりしを、常陸殿といふ女房、「あな、ゆゆし。ただ参らせたまへ。『扇引きなど人々にせさせん』などありし。御扇どもまうけて、待ちまゐらさせたまふに」とあれば、この人たちに具して参りぬ、〔堀河天皇は〕待ちつけて、泉の有様うちうちに問ひなどして、「扇引き、今宵は、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しすゑて、大弐の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわろかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、

そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。

ここからは作者の参加が特に求められているように読めるし、「泉の有様うちうちに問」う天皇の態度は親しげである。そうして、わざわざ作者達の帰りを待って始めようとした遊戯を作者の言葉によって翌朝まで延期し、上席らしい「大弐の三位殿」を差し置いて作者が一番に指名されたこと、気に入らない扇を引き当てた作者がそれを投げ置き、但馬殿が、天皇から親しく扱われている作者なればこその態度で、他の者には真似できないと感嘆したことなど、どれも作者が堀河天皇から特別に目をかけられていたことを示す記述である。

（十五）森田兼吉「『讃岐典侍日記』の主題」女流日記文学講座第四巻（勉誠社、一九九〇年）

（十六）瀬戸由美子「『讃岐典侍日記』が書きたかったもの」『国文学　言語と文芸』第七六号、一九七三年五月

（十七）宮崎荘平『成尋阿闍梨母集　全訳注』（前掲）解説等。

（十八）「『世に侍らずなり侍りなんに、な散らしそ』／と言ひ置けど、それも、思ひ知る人かならずしも侍らじ。もしあはれ知り給はん人は、あはれともおぼせかし」「『ただとく死なんよりほかの喜び、今はこの世にあるまじ』とのみぞ。すこしもあはれなりと思はん人は、ただ、『とく死ね』と思ふべきなり。……残りて世にあらん人、これを見て、他縁にしたがひて、功徳になるべからんことをとぶらふべきなり」などである。

（十九）『建礼門院右京大夫集』は歌集ではあるが、多分に日記文学的性質を持つことを考慮して、対象に含めた。

（二十）南北朝の動乱期を生きた『竹むきが記』の作者もまた、夫を非業の死によって喪っているのだが、敢えて直截にはそれを記すことがなかった。

（二十一）敦道親王没後すぐの服喪期間中とする説と、没後一～二年を経て、彰子の許に出仕する前後とする説である。

（二十二）前掲『全講和泉式部日記　改訂版』考説（二二）参照。

（二十三）鈴木一雄氏は、女流日記を「自己に執する女が、「たったひとりの世の中」の構築をかけた作品」であり、「おのれの真実を吐露するために、そしてそれによって、おのの「たったひとりの世の中」の悲しみや悶えを訴え、さらには自分自身の生命をよみがえらせるため」のものであると説かれる（『王朝女流日記論考』至文堂、一九九三年）。

（すがわら　りょうこ・京都学園大学非常勤講師）